

「子を産むことによって救われる」とは

—— テモテへの手紙第一 2 章15節の釈義をめぐって ——

伊 藤 明 生

テモテへの手紙第一 2 章15節のギリシャ語本文は次の通り：

σωθήσεται δὲ διὰ τῆς τεκνογονίας,
ἐὰν μείνωσιν ἐν πίστει καὶ ἀγάπῃ καὶ ἀγιασμῷ μετὰ σωφροσύνης·

主要な邦訳を紹介しておく。

新改訳聖書：「しかし、女が慎みをもって、信仰と愛と聖さとを保つなら、子を産むことによって救われます。」

口語訳聖書：「しかし、女が慎み深く、信仰と愛と清さを持ち続けるなら、子を産むことによって救われるであろう。」

共同訳聖書：「しかし婦人は、信仰と愛と清さを保ち続け、貞淑であるならば、子を産むことによって救われます。」

新共同訳聖書：「しかし婦人は、信仰と愛と清さを保ち続け、貞淑であるならば、子を産むことによって救われます。」

四つの邦訳聖書には大意において大きな相違は認められない。常識的に以上の日本語の文を読むと、文の主旨は女は子を産むと言う手段によって救い（罪からの？）に与ると理解できる。本当に、それがテモテへの手紙第一 2 章15節の意味するところであろうか。

この箇所を解釈する上で議論の対象となる文法的、語彙的論点が六つある。一つは σωθήσεται の意味である。霊的な意味の救いか、それとも物理的・肉体的な意味合いか。二つめに動詞 σωθήσεται の明記されていない主語がだれであるか。第三に διὰ τῆς τεκνογονίας の意味である。出産一般のことか、メシヤ（キリスト）の誕生を指すのか。つまり、冠詞 τῆς の意味をどう理解するかと

言うことになる^①。四番目に、前置詞 *διὰ* + 属格は何を意味するか。道具的に理解するか、それとも時間的または付随的に理解するか^②。そして、五番目に *ἐάν* + 接続法をどのように理解するか。最後に、動詞 *σωθήσεται* は三人称単数形であるが、*ἐάν* 以下、つまり動詞 *μείνωσιν* は三人称複数形となっている。この数の不一致をどう理解するかが問題となる。以上の論点を組み合わせて提案されてきた解釈には以下のようなものがある。

1. *διὰ τῆς τεκνογονίας* を出産一般と解し、*σωθήσεται* を霊的な意味での救いとの理解する。この解釈を、ポーターは、特に文法、語彙上の議論から支持している^③。
2. 創世記3章16節の問題と関連があるので、*σωθήσεται* を「守る」という肉体的な意味に理解し、*διὰ τῆς τεκνογονίας* は出産を指すと解釈する。
3. *σωθήσεται* は霊的な意味に取り、*τεκνογονία* は肉体的に理解するが、前者と後者との関係 (*διὰ*) を、産みの苦しみから救い出される、と言う意味に理解する^④。
4. 救いは圧倒的に霊的な意味に取り、出産への言及は典型的な女性の役割の意に理解する。女性は男性の役割を求めるのではなく、女性の役割を忠実に果たすことに救いがあるとする^⑤。
5. 出産に典型的に見られる女性の役割を果たすことにより支配的宗教的象徴 (2章12節) になる間違いから救われる、守られると解釈する。
6. メシヤの誕生によって霊的に救われることを指す^⑥。

最初に触れた六つの論点に関するポーターの語彙的、文法的議論^③はかなり明瞭であり、少なくとも文法的、語彙的議論として反論を差し挟む余地がほとんどないと思われるので、ここで詳細に辿ってみる。先に紹介した解釈6に反論して、ポーターは先ず、*τῆς τεκνογονίας* の冠詞から「ある特定の出産」がここで取り上げられているとは容易には結論できないとしている。むしろ総称的な (generic) 用法と理解するべきであると指摘している^⑦。次にポーターは第一テモテを始め、牧会書簡、さらにはパウロ書簡での動詞 *σώζω* の用法に触れ、ほぼすべての用法が霊的な意味での救いであるので、この箇所でも間違いなく、同様の意味であろうと結論付けている^⑧。そして、このことは反意の *δέ*

と εἰν で導入されている条件節によって確認されるとしている。第三に名詞 τεκνογονία の意味であるが、新約聖書では、ここにしか見い出されない。ただ同根の動詞 τεκνογονέω が第一テモテ 5 章 14 節に見い出される。5 章 14 節では γαμεῖν, τεκνογονεῖν, οἰκοδεσποτεῖν（結婚、出産、家を取り仕切る）と論理的な継続性に従って並べられているので、τεκνογονία は 2 章 15 節でも女性の責任一般の意味には取り難い。また、5 章 10 節で τεκνοτροφέω（子供を育てる）と言う動詞が使われていることから、τεκνογονία に出産だけではなく、育児の意味まで読み込むのは不適切と思われる。τεκνογονία は聖書外でも比較的まれな単語ではあるが、用いられるところでは、ほぼ「出産」という意味に規定することができる⁹⁹。

四番目に、ポーターが取り上げているのは、前置詞 διὰ の意味である。様々な提案がなされてはいるが、文法的に論じれば、διὰ＋属格には時間的意味と道具的意味との二つに限られる。ところが、時間的意味の用法と理解される用法は、日、年、夜など、すべて明確に時間に関する言葉が伴っている（例としては使徒の働き 1 章 3 節、5 章 19 節、24 章 17 節、ガラテヤ人への手紙 2 章 1 節）。しかも動詞 σώζω に霊的な救いの意味を読むならば、時間的意味を διὰ＋属格に読み取ることはむずかしくなる。出産の時に霊的な意味で（罪からの）救いに与るとは考え難い。さらに、牧会書簡の他の箇所でも動詞 σώζω と前置詞 διὰ が組み合わせられているテトス 3 章 5 節でも道具的な意味で用いられていることから、道具的意味の正しさは確認できる。五番目にポーターは動詞の数の問題を扱っているが、動詞の主語の変更を意味するものではなく、代表的存在として単数の女性が想定され、複数に変更した際にはさらにすべての女性を含める意味合いがあったとする。最後にポーターは条件文に拘わる問題に触れている。この条件文は「第三級条件」と呼ばれるもので¹⁰⁰、条件節には読者である女性たちにとって根本的前提が提示されている。女性たちは自制をもってキリストを信じ、同信の友を愛し、潔い結婚生活を送る、と。従って、第一テモテで取り上げられている「女性たち」とはキリスト者であり、地上での出産という務めと終末的救いとが、この箇所では結び付けられている、と結論する。

以上のポーターの議論は要約であるので、議論の微妙なニュアンスが失われているかとも思うが、結論は明白であろう。つまり、語彙的、文法的議論から導き出せる結論は、第一テモテ 2 章 15 節では、信仰、愛、潔さに留まり続ける

ならば、女性は出産によって救われる、と言うものである。勿論、このような結論に様々な方面から批判を加えることは容易である。例えば、パウロの他の書簡を始め、第一テモテ（1章15, 16節, 2章3～6節など）、また他の牧会書簡（テトス3章3～7節, テモテへの手紙第一1章8～10節など）の救いに関する教えに反する、と。ポーターは、そのような「イデオロギー批評」はともかく、語彙と文法から見れば、この箇所の意味は明確であると論じている。そこで、本稿では、ポーターの議論の妥当性についてさらに論じて置きたい。

ポーターの語彙と文法の議論は、第一テモテ、あるいは他の牧会書簡での用法・用例に基づくものである。比較的常識的方法論ではあるが、このような方法論の背後には大きな前提がある。一つの単語あるいは文法を特定の書簡内あるいは同一の著者は一貫した意味で用いる、と。そのような蓋然性はもちろん高いが、文脈によっては多少フレキシブルに用いられる可能性もある。第一テモテ2章15節を解釈する上で、重要な文脈は第一テモテそのものだけではなく、創世記1～5章であると筆者は考える。第一テモテ2章13, 14節とでは明確に創世記の内容に言及されている。14節の「女」とは「エバ」に他ならない。15節の原文には主語が明記されていないが、直前の「女」が主語と理解できるが、女の代表である「エバ」と女性一般とが二重写しになっている。とすれば、15節の「救い」、「出産」を理解するには、「エバ」の「救い」、「出産」が当然のこと参考になると思われる。ポーターの行なったような「純粋な」語彙的議論では、このような発想は全く生まれてこない⁽¹⁾。その意味では少々不公平な批判かもしれないが、この点がまさにポーターの議論の盲点である。実は、創世記4章は、エバが出産によって救われるさまとして読むことができる。エバは「惑わされてしまい、あやまちを犯し」たが、それに対する神の答えは出産に拘わるものであった。『あなたのみごもりの苦しみを大いに増す。あなたは、苦しんで子を産まなければならない。』（創世記3章16節前半）そして、その後エバはみごもり、カインとアベルとを産む（創世記4章1, 2節）。特にエバの言葉は注目に価する。『私は、主によってひとりの男子を得た。』（4章1節）⁽²⁾さらに、セツをエバは産んでいる（4章25節）。出産に伴う苦しみが増すと言うのが、裁きであったにも拘わらず、出産の苦しみの中エバは守られてカインとアベル、そして殺されたアベルの代わりにセツを無事に産んでいる。第一テモテ2章15節を、このような枠組みで解釈することは十分に妥当なことと思われる。

さらに、第一テモテ 2 章 12 節での「女が教えたり男を支配したりすること」⁽¹³⁾とは、創世記 3 章 16 節の「彼は、あなたを支配するようになる。」と非常に関連性が高いことを見れば、このような枠組みで 2 章 15 節を解釈することの妥当性は、より明らかになってくる。

「救い」をポーターは霊的な意味と物理・肉体的な意味とに二分して前者の意味としたが、創世記の文脈から考えると、少々短絡的と思われる。「出産の苦しみ」はエバの背きに対する神の裁きであった。とすると、出産の苦しみの最中守られることにも霊的な意味合いがあることになる。古代世界では、現代のような霊と肉（物）との二分は通常明確にはなされていなかった。罪の結果、生まれながら盲人となる（ヨハネ 9 章 2 節）、または信仰によって癒しがなされる（マルコ 5 章 34 節⁽¹⁴⁾など）と思われていた時代のことである。医術と呪術とが厳密には区別できない時代であることを忘れてはならないであろう。私たちが聖書の本文で「救い」がどちらの意味で用いられているかを尋ねること自体を筆者も否定するつもりはない。しかし、聖書記者にとっては、私たちが想像する以上に、ある箇所では「霊的」意味で、すぐ次の箇所で「肉体的」意味で用いることは容易なことであったと思われる。従って、ポーターのように、第一テモテさらには牧会書簡では一貫して「霊的」意味で用いられているから、ここも同様であるとは安易に結論できないと思われる。とすると、一見決定的に見えるポーターの議論も再考の余地が見い出される。とりわけ解釈 2 の可能性が容易に否定できなくなる⁽¹⁵⁾。

勿論第一テモテ 2 章 15 節では動詞は未来時制で用いられている。もしエバのみにについて言うならば、過去（アオリストまたは未完了）時制が適切であろう。エバへの言及に端を発してはいるが、15 節ではエバから始まって、女性一般へと話が拡大している。この条件文（ἐάν＋接続法が条件節）は第三級（より鮮やかな未来の条件）と分類される。つまり、もし信仰と愛と潔さに（今後）留まり続けるならば、（将来）救われる、ということである⁽¹⁶⁾。

注

- (1) ギリシャ語の冠詞の難しさについては、D. A. Carson, *Exegetical Fallacies*, (Grand Rapids, Mich.: Baker, 1984), pp. 83–84; S. E. Porter, *Idioms of the Greek New Testament*, second edition (Sheffield: Sheffield Academic Press, 1994), pp. 103–104（邦訳『ギリシャ語

新約聖書の語法』「ナザレ企画, 1998年」85～86頁) 参照のこと。

- (2) S. E. Porter, *Idioms of the Greek New Testament*, p. 148-51 (邦訳『ギリシャ語新約聖書の語法』132～35頁)。
- (3) S. E. Porter, 'What Does it Mean to be "Saved by Childbirth" (1 Timothy 2.15)', *Journal for the Study of the New Testament* 49 (1993) pp. 87-102. 同様に, T. R. Schreiner, 'An Interpretation of 1 Timothy 2:9-15: A Dialogue with Scholarship', in: A. J. Köstenberger, T. R. Schreiner and H. S. Baldwin (eds), *Women in the Church: A Fresh Analysis of 1 Timothy 2:9-15*, (Grand Rapids, Mich: Baker, 1995), esp. pp. 146-53. シュライナーは更に, このような解釈が必ずしも信仰義認の教理を否定するものでないことを論じている。M. Dibelius and H. Conzelmann, *The Pastoral Epistles*, Hermeneia (Philadelphia: Fortress, 1972), p. 48 を, George W. Knight III は解釈2に分類しているが, この立場と思われる。
- (4) 明らかに, このような前置詞 *διὰ* の解釈には無理がある。
- (5) J. L. Houlden, *The Pastoral Epistles*, New Testament Commentaries (London: SCM Press/Philadelphia: Trinity Press International, 1989), p. 72-73 は, ここに分類できるであろう。ホウルデンは出産のみならず, 育児も *τεκνογονία* に含められ, ギリシャ語本文での後半部分の条件節の三人称複数の主語は子供たちであるとする。J. N. D. Kelly, *The Pastoral Epistles*, Black's New Testament Commentary (London: A & C Black, 1960), pp. 69-70; G. D. Fee, *1 and 2 Timothy, Titus*, New International Biblical Commentary (Peabody, MA: Hendrickson, 1988), pp. 75-76 も, この解釈と思われるが, 信仰によって女性も救われることを強調している。
- (6) 以上の解釈の分類は, George W. Knight III, *The Pastoral Epistles: A Commentary on the Greek Text*, The New International Greek Testament Commentary (Grand Rapids: Wm. Eerdmans/Carlisle: Paternoster, 1992), pp. 144-49 によった。ジョージ・ナイト三世自身は6の解釈を支持する。解釈6を支持する他の注解者には, 柴田敏彦「テモテへの手紙」『実用聖書注解』(いのちのことば社, 1995年), 1349頁もいる。
- (7) *Idioms of the Greek NT* の表現では *categorical* (カテゴリー的) が用いられている (p. 104; 邦訳86頁)。
- (8) 動詞 *σώζω* は, 牧会書簡内では第一テモテ 1章15節, 2章4節, 15節, 4章16節, 第二テモテ 1章9節, 4章18節, テトス 3章5節に見られる。
- (9) ポーターは96頁の注28でヒポクラテス, ガレン, ヨハネス・フィロポヌス, シンブリキウスの用例を列挙している。ギリシャ語訳旧約聖書には全く用いられていない。
- (10) *Idioms of the Greek NT*, pp. 261-63 (邦訳, 251～52頁)
- (11) 動詞 *σώζω* も名詞 *τεκνογονία* も創世記 1章から 5章には全く見出されない。
- (12) ヘブル語本文 (הָיִיתִי אִישׁ אֶת־יְהוָה) は難しい。G. J. Wenham は 'I have gained a man with the LORD's help' と訳している (*Genesis 1-15*, Word Biblical Commentary 1 [Waco, Tx: Word, 1987], pp. 92, 101-102)。また, V. P. Hamilton は 'I have acquired a man from Yahweh' と訳している (*The Book of Genesis Chapters 1-17*, The New International

Commentary on the Old Testament [Grand Rapids, Mich: Eerdmans, 1990], pp. 218–21)。ギリシャ語訳聖書では ἔκτησάμην ἄνθρωπον διὰ τοῦ θεοῦ (私は神を通して人を得た) と訳されている。やはり、このエバの言葉は歓喜の表現、出産を通した神の守りを喜び、感謝する言葉と理解できるであろう。

- (13) もちろん、語彙上厳密な並行は第一テモテ 2 章 12 節と創世記 3 章 16 節後半との間には存在しない。しかも第一テモテ 2 章 12 節で用いられている動詞 αὐθεντέω は新約聖書、ギリシャ語訳旧約聖書などで唯一の用例であり、厳密な意味について議論の余地があることも事実である。この節に関しては別の機会に論考を加えたい。
- (14) マルコ 5 章 34 節のイエスの言葉は θυγάτηρ, ἡ πίστις σου σέσωκέν σε (娘よ、あなたの信仰があなたを救った。) であった。
- (15) 解釈 2 を支持すると思われる類似構文には、第一ペテロ 3 章 20 節 (διδωσάμεθα διὰ τοῦ ὕδατος), 第一コリント 3 章 15 節 (αὐτὸς δὲ σωθήσεται, οὕτως δὲ ὡς διὰ πυρός) がある。
- (16) 三人称複数の明記されていない主語については、ポーターの言う通りかもしれないが、あるいはアダムとエバから、妻と夫と言う主語も十分に考えられると思う。また、創世記 3 章の枠組みで解釈する立場には、「女性メシヤの誕生により救われる」という上記の解釈 6 も含められるが、「メシヤの誕生」への言及が余りにも唐突であるだけではなく、メシヤであるイエスの誕生によって女性が救われるというのは、熟慮してみると、おかしい理解である。メシヤの誕生ではなく、メシヤの救いのみわざ、十字架の上でのキリストの死こそが救いの土台である。

[Abstract in English]

What does it mean to be “Saved by Childbirth” (1 Timothy 2:15)?

A. Ito

1 Timothy 2:15 is very controversial in many respects. Recently many scholars and commentators tend to argue on the basis of grammatical and lexical analysis that the verse means that a woman will be spiritually saved by bearing a child. This sort of analysis is by all means sound. However, interpretation of a certain text should not be complete with a mere grammatical and lexical analysis. The present article argues for an alternative interpretation by reading the verse in the light of Genesis chs. 3–4, concluding that a woman will be kept safe through childbirth.

〔日本語要約〕

「子を産むことによって救われる」とは
—— テモテへの手紙第一 2 章15節の釈義をめぐって ——

伊 藤 明 生

第一テモテ 2 章15節は、女性論との関連で問題となる聖書箇所であるが、近年特に、文法的、語彙的分析の結果、女性は出産によって霊的に救われると言う意味にしか読めないとする解釈が比較的一般的になってきた。そのような文法的、語彙的分析には妥当性も認めなければならないが、解釈というものは、必ずしも文法的、語彙的分析がすべてではない。どのような枠組みで各々の語を読み、どのような組み合わせを読み取るかは、解釈の鍵を握ると言っても過言ではない。本稿では、一つの解釈の可能性として、創世記 3, 4 章を枠組みとして読むことによって、出産の際に無事に守られることを意味すると理解できると論じる。